NIIGATA COLLEGE OF NURSING
PORTICO
vol.20
2011.12
新潟県立看護大学ニュース　ポルティコの広場

桜蓮祭を終えて

第10回桜蓮祭実行委員長　高澤　弥生

今年も桜蓮祭が秋の涼しい季節とともに過ぎていきました。十年目という大きな節目を迎え、今まで協力してくださった学校の関係者の皆さま、後援会、地域住民の皆さまへの感謝の気持ちをこめて「愛里賀十（ありがとう）～里を愛し十年を祝う～」をテーマに開催しました。毎年恒例の妊婦体験ができる企画や各サークルの出店、ダンスなどの公演に加えて、新しい企画も行うことができ、とても充実したものになったのではないかと思います。

桜蓮祭当日までは普段の学習とともに準備も行っており、忙しい毎日を送っていました。実行委員二年生六人が中心となり、それぞれが役割を持ってお互いに助け合いながら、実行委員一年生十人を引っ張っていく形で準備を進めていきました。どれも大変でしたが、特に新しい企画のひなたさんのライブ、地元の美容院によるヘアーショーは近年に前例がない分、考えがまとまらず大変でした。この二つの企画は松本みのりさんが先頭に立ち、自らも企画に積極的に参加し、当日は委員、参加した方々や来場してくださった方々、皆が楽しめるものになりました。また、今年のテーマをもとにポスター・パンフレット・看板・オリジナルグッズを制作することにも苦労しました。それぞれ阿部祥子さん、岩瀬美佑璃さん、今泉綾さん、松本みのりさんと松本奈々さんが一年生とともに進めていきました。毎年欠かせない桜や蓮の絵に「ありがとう」とかけて十匹の蟻の絵を加えることが難しかったですが、上手く今年らしさを出すことができました。もう一つ新しいこととして、十周年を祝う気持ちを込めて桜蓮祭の垂れ幕を初めて作りました。大学の正面玄関に設置していたので、見た方がいらっしゃると思います。これらの地道な準備のおかげで、当日は毎年来てくださっている方々を含め、ひなたさんのファンの方々や初めて桜蓮祭に来てくださった地域の方々など大勢の人でにぎわい、そして交流をもつことができとても嬉しく思います。

桜蓮祭を終えた今振り返ってみると、ただ一人の力だけではなく、何人もの人の力を合わせてできたものなのだと強く感じます。まさに「ありがとう」という感謝の一言だけです。前述の通り、多くの方々へのお礼として楽しんでいただこうと開催しましたが、始めから終わりまでたくさんの人に支えられ、感謝の気持ちは増すばかりです。最後に、実行委員の皆、協力してくださった学校関係者の皆さま、後援会、地域住民の皆さま、本当にありがとうございました。

もくじ

1　桜蓮祭を終えて
2　メディカルグリーンツーリズム継燈式
3　民謡流し
3　オープンキャンパス
4　今年度のふれあい実習について　実習を終えて
5　新教員紹介
5　実習を終えて
6　大学院学位論文発表会　上越地域看護研究発表会　ゼミ紹介ー基礎ゼミ
7　卒業研究に取り組んで　サークル紹介
8　卒業生は今　研究報告

メディカル
グリーン
ツーリズム

メディカルグリーンツーリズムのモニターツアー

特任教授　杉田　収

メディカルグリーツーリズムは新潟県立看護大学看護研究交流センター事業として、地域の活性化、北陸新幹線（平成26年度開業予定）活用、看護大の地域貢献を目的として平成22年度から始まりました。「ふるさと上越ネットワーク（東京都）」会員に対するニーズ調査を実施し、健康チェック、健康改善リフレッシュ、介護準備学習の各ツアーコースを作成しました。そのコース評価のためのモニターツアーが平成23年9月に実施されました。

健康チェックコース（1名参加）は春日山城跡観光（桑取温泉宿泊）と合わせた新潟労災病院での人間ドックで、検査項目の選択による料金の低廉化、個別診察の重視、健康講話の新設など、新たな試みを含むドックでした。参加者の評価は「満足」でしたが、応募者の少なかったことが問題でした。

健康改善リフレッシュコース（9名参加）は笹ヶ峰での森林セラピー・ノルデックウオーキング（どちらかを選択）、温泉ソムリエ講話（赤倉温泉宿泊）、上越野菜の料理体験でした。大型台風15号が襲来中でしたが、地域を代表する一流の方々による「体験」であったことから、参加者の満足が得られました。

介護準備学習コース（12名参加）は3種類の介護施設見学、料亭宇喜世・長養館での昼食、赤倉温泉宿泊、看護大で福祉の現状を知る講話と食の工夫体験、加えて親鸞聖人ゆかりの地めぐり観光でした。長養館では初めて高齢者用食が調理され参加者が試食しました。

各コース参加者には看護大教員が作成した健康と食に関する小冊子がプレゼントされ喜ばれました。ツアー参加者による評価を踏まえた検討が今後の課題です。この度のツアー参加者の募集に当たっては、学内教職員の皆様から多大な御協力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

親鸞聖人上陸の地（居多ヶ浜）のツアー参加者

継燈式

7月7日に、はじめての病院実習である基礎看護学実習を前にした2年生が、先輩からの灯を受け継ぐことで、臨地実習への決意を新たにしていました。実習病院の方々や教職員からの暖かい励ましを受け、看護者に近づいた喜びと責任を感じ、看護への道をまた一歩前進しました。

民謡流し

出発前に全員集合!!（大学正面玄関前）

民謡流しの様子

7月25日「上越まつり」の民謡流しに、学生46名が参加しました。当日は、時々小雨が降ることもありましたが、学生達の熱気のせいか、雨も収まってくれました。また、色とりどりの浴衣姿で、元気いっぱいに息のあった踊りで、民謡流しを盛り上げていました。

オープンキャンパス

8月3日、23日にオープンキャンパスが行われ、両日併せて393名の方々が参加されました。様々な看護の体験を楽しそうに行っている姿が印象的で、看護師になりたいという思いが高まっているように見えました。他にも、学長室訪問や在学生との懇談等を行い、「看護という職業がどれだけ重要かということが分かった」「改めて、この大学で看護を学びたいと思ったし、ここなら自分のやりたいことができる」などの意見が多く寄せられました。

今年度のふれあい実習について

教授　中野　正春

平成23年度のふれあい実習は例年のように実施されました。内容は以下の通りです。

1）事前学習会　9月16日

実習のオリエンテーション、ミニレクチュア、フォーラム（地域づくりを行うNPOから話を聞く）、地区担当者との顔合わせ

2）現地実習　10月11日～13日

上越市の山間部4地区（大島区、安塚区、浦川原区、牧区）に分かれて行われました。共通基礎系教員10名全員と看護系教員2名が90名の学生を担当しました。

（第1日）

午前：大学出発、それぞれの地区での地域探索と聞き取り調査

午後：各民泊先で農作業などの家事手伝い、家庭の人との交流

（第2日）

午前：地区ごとで地域の食材を使った調理実習、それを昼食とする

午後：調理実習で作ったものをお土産として、お年寄り宅訪問、聞き取り

（第3日）

午前：各地区でのお楽しみ会（集会場や訪問先での出し物を行い交流）

3）事後学習会　10月14日

発表交流会や学内展示でのまとめ方や資料の作り方を指導しました。

4）発表交流会　10月21日

実習をした現地で実習の成果をグループごとに発表しました。

5）学内展示　10月24日～28日、　11月5日（大学祭）

他学年の学生や外部の人にも成果を発表するためポスターを展示

実習を終えて

ふれあい実習を終えて

1年生　宮口　絵里

10月11日から13日までの3日間、上越市の大島地区でふれあい実習を行いました。私たちのグループは地域で暮らす人々の生活の成り立ちを知ること、生活者の視点に立って物事を考える方法を探ること、地域の人々がよりよく生活するために果たすべき看護職者の役割は何かを追及することの3つを目的として、ホームステイやお年寄り宅の家庭訪問、地域探索を実施しました。私はこの実習で大島地区の方々の価値観や支え合いながら暮らすことの大切さを学びました。

ホームステイやお年寄り宅訪問、地域探索でお話を伺ったところ、大島地区の方々は生きがいを見つけ、常に人生を楽しんでいるように感じました。年齢が増すごとに自分のできることが変化するため、生きがいも変えざるを得なくなってしまいます。これは一般的に言えば悲観的に捉えられてしまうことだと思います。しかし、大島地区の方々はそうではありませんでした。昔できていたことができなくなり、生きがいが変わっていくことを自然なものとして受け入れ、新たな生きがいを見つけていました。

大島地区の方々は自分で作った野菜や料理などを交換したり、農作業などを代行したりと常にお互いに支え合いながら日々の生活を送っていました。それだけではなく、お互いの健康をも気遣っているというお話を聞きました。挨拶をした時の顔色を気に掛けたり、電気が点いているかいないかで普段通りの生活を送っているかを確認したりしているそうです。普通は高齢者のみの家庭は様々な危険があります。しかし、このように地域全体で高齢者を支えることによって快適な生活が遅れているのではないかと感じました。

このふれあい実習では普段の大学の講義では学ぶことはできない様々なことを学ぶことが出来ました。将来看護職者になるうえで地域の方々の価値観や暮らしの様子を学ぶことは大変重要なことだと思いました。今回学んだことを将来に生かせるように学びを深めていきたいと思います。

新教員紹介

教授
坪倉　繁美（つぼくら　しげみ）

平成23年7月より着任しています看護管理学の教授の坪倉繁美です。どうぞよろしくお願い致します。

看護管理学は、医療・福祉施設における管理や市民の健康づくりや政策立案などを担う看護行政等について教授・研究を行う領域です。私の仕事のキャリアといたしましては、臨床・訪問看護、保健師活動、看護師・保健師教育、国・県・市の看護行政、看護教師を育成する教師教育、日本看護協会の事業開発部門など、看護を基軸にしながら色々な分野で看護実践、また管理者として治めてまいりました。あらゆる分野での出合いを通して多くの方々から教えや影響を受けて、考えを深めてまいりました。これらの体験を活かしながら発展させ、教育し、地域活動にも役立てればと願っております。

出身は鳥取県ですが、仕事のため大阪、兵庫、東京、滋賀、東京と移り住み、今は上越市の高田で暮らしています。新潟についての書物を読んでいくと、北前船の寄港地で栄えていた江戸から明治時代の新潟の人口は、東京をもしのぐ全国一であり栄えていた地域であることを知るにつけ、なるほどと今でも新潟県の衣、食、住、産業、システムについては栄えていた頃の文化が、あちこちで息づいているなと感じております。このように日々発見することも多く、この地で生活することも楽しんでおりますので、よろしくお願い致します。

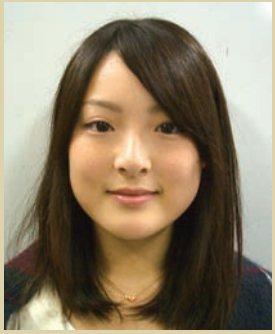
基礎看護実習を終えて

2年生　藤ノ木　陽子

緊張や不安、期待を抱え、どきどきしながら病棟を訪れた実習初日。実際の看護の現場新鮮さと様々な戸惑いを感じつつも病院に通い、実習が楽しいと感じられる程に余裕がでてきた頃には、あっという間に7日間が終わっていたように思います。

この実習を通して学んだのは、私たちは患者さんという「人」を看護の対象にしているのだということです。私が受け持たせていただいた患者さんは、実習にあたって学生を受け入れるということに少しの抵抗を感じていらっしゃいました。いざコミュニケーションを図ろうと思ってもこちらから話しかけるばかりで口数は少なく、他の医療スタッフの前では笑顔で話す患者さんの姿を見て落ち込むこともありました。上手く意思疎通ができないことに不安と焦りを感じずにはいられませんでした。しかし、毎日言葉を交わすことで私の存在に慣れてくると、患者さんから緊張の表情が消え、学生の役に立ちたいと自らお話を聞かせてくれるようになりました。患者さんを知っていくことに嬉しさと喜びを感じることができ、また、患者さんから得られる情報が増えたことで看護計画を立案しやすくなりました。看護ケアの実施以前に、コミュニケーション1つであっても、患者さんの協力なしには成り立たないのだということを実感させられました。

ある患者さんに「看護はいつも看護師からの一方通行だ」と言われたことが心に引っ掛かり、そのことについて実習中もずっと考えていました。しかし実習を終えた今、やはり看護は一方通行では行えないのだと思います。こちらが患者さんに寄り添った看護ケアを提供したいと思っても、患者さんにそれを理解してもらえないこともあれば、逆にこちらが患者さんを理解できないこともあります。しかし、「人」として患者さんを敬い、よい信頼関係の中で、患者さんの同意と協力を得ながら看護を施そうとする姿勢が大切なのだと思いました。



地域看護学実習を終えて

4年生　山口　愛

地域看護学実習では、多くの印象に残る体験をすることができました。地域看護学実習は、地域診断実習、保健所・市町村実習、訪問看護実習の3つで構成されています。その中で特に印象に残っていることは、健康教育を実施した時のことです。

私たちは、糖尿病についての健康教育を実施すると決め、資料作りやシナリオ作りを行いました。地域の方々にわかりやすく説明するためにはどうしたら良いか、何度も練習を重ね、緊張と不安の中で本番を迎えました。本番では、地域の方々とコミュニケーションを取りながら、健康教育を行うことができました。住民の方々の反応はとても良く、「分かりやすかったよ」「これならできるわ」などと、私たちにとって嬉しい言葉をかけていただくことができました。一方的に私たちの理想を押し付けるのではなく、地域の特性や住民の方々の価値観などを理解し、共に学んでいく姿勢が重要なのだと学ぶことができました。

私は地域看護学実習を通して、地域看護学とは何かをわずかながら知ることができたと思います。地域看護とは、すべての人が生まれ育った地域で、最期まで生活することが自然という考えの下、支援を行っていくこと。地域住民の健康の意識を高め、健康で過ごすために必要なことを知ってもらうこと。制度の網から零れ落ちてしまいそうな人を見つけ、すくい上げること。新生児から高齢者、妊産婦や障害を抱える人など、地域で生活する人すべてを対象とすること。地域看護とは、あらゆる可能性に満ちているのだということを知ることができました。

今回の実習を通して、地域看護の実際を知り、その魅力を知ることができました。地域実習は、私に新たな夢を与えてくれました。来春より、私は保健師として働くことになりますが、今回の実習で学んだこと、感じたことを忘れず、日々努力していきたいと思います。指導して下さった先生方、保健師の方々、背中を押して下さった地域の方々に感謝申し上げます。また、同じグループのメンバーにも感謝しています。ありがとうございました。

大学院 学位論文発表会

9月27日に学位論文発表会が行われました。学生は、これまでの研究成果を緊張しながらも、堂々と発表していました。また、活発な質疑応答がされ、新たな学びと課題を得ることができたようでした。

発表された論文

心身の不調を体験した女性の更年期外来受診に至るプロセス
重症先天性心疾患の子どもがひとり立ちするまでに育てた母親のライフストーリー

上越地域 看護研究発表会

10月11日に、上越地域の各病院や地域に所属する看護職員の看護連携を図る目的で、上越地域看護研究発表会が開催されました（参加者156名）。各機関から12題の研究発表がされ、参加者は熱心に研究発表を聞き、活発な質疑応答がされていました。

公開講座

11月20日に、上教大・看護大連携公開講座として、テキサス大学アントニオ校ヘルスサイエンスセンターのサンドラ・サンチェス教授をお招きし、「人を勇気づけ安らぎを与えるコミュニケーションとは―医療現場における研究成果から―」というテーマでご講演頂きました。終末期や緩和ケアにおける先生の実践から、患者・家族の立場となってコミュニケーションを図ることの重要性を改めて感じることができました。

▲サンドラ・サンチェス教授（中央）

ゼミ紹介〈基礎ゼミ〉

TOEICゼミ

1年生　熊木　藍

私が1年生の基礎ゼミでTOEICを選択した理由は、在学中に語学留学をしたいと思っているからです。もともと英語は苦手分野なのですが、受験勉強がきっかけで英語でのコミュニケーション能力をきちんと身に着けたいと思うようになりました。ゼミではテスト対策として模擬試験による実力や弱点の把握、リーディングやリスニング力向上の学習方法などに取り組んでいます。テキストも一人1冊貸し出してくれる為、スムーズに学習に移れる上、個人的な学習では得ることができない情報や指導がもらえるので効果的に学習ができているように思います。TOEICテストは和文英訳、英文和訳などの技術ではなく、身近な内容からビジネスまで幅広くどれだけ英語でコミュニケーションできるかということを測るものです。最近ではグローバル社会に対応するための能力を身につけるため、多くの社会人や学生が受験しています。社会の変化に対応するために英語を学ぶこともちろん大切ですが、私は自分の視野を広く持ち、様々な文化や価値観を知るためにも英語力はとても重要なツールだと思っています。夏休みや春休みなど長期の休みを持てるのは学生の特権です。英語でのコミュニケーション能力を用いて、他国の人々と価値観を共有できるよう継続して学んでいきたいと思います。またそれらを少しでも看護の道で活かし、付加価値のある国際的な看護に繋げていきたいと考えています。

卒業研究

卒業研究に取り組んで

4年生　和知　祐紀

卒業研究のテーマについて考え始めたのは3年生の終りごろになってからでした。テーマについてはたくさん悩みましたが、半年間の領域別実習の中である出来事があり、そのことを研究して明らかにしたいと強く思い、卒業研究のテーマとして決めました。

4年生になってからは、研究の計画の立案、実習の計画立案や研究のデータ集めの準備などたくさんの研究の為の準備に加えて地域の実習がありとても忙しい毎日が続きました。その頃は初めての経験で何もかもわからず、方向性に迷い、悩むうちに研究のテーマや目的がわからなくなったこともありました。しかし、ゼミの先生が親身になって指導してくれ、次第に自分のやりたいことを明らかにすることができました。また、専門実習でお世話になった看護師さん達もとても丁寧な指導をして下さいました。おかげで、研究を進めていく上でとても大事な研究への熱意を持ち続けて取り組むことができました。この研究を通して、自主的に目的・目標を定め熱意をもって学び、取り組む姿勢が大切であるということを学びました。

▲基礎ゼミナールの様子

現在は、得られた結果の考察を考えているところです。文献の意見に、自分の考えを付け加えていくことを学んでいます。研究で得られた情報を分析して結果が明らかになっていく過程の中で、先生が最初のゼミでおっしゃっていた「研究は楽しむもの」という言葉を思い出します。当時はその言葉に疑問を感じていましたが、最近研究の段階が進んでいくうちに実感するようになりました。今回の研究で、自分が感じた疑問や思いを明らかにしていくまでの過程で学んだことは、今後看護師として働き始めた時にも生かせる強みになると考えています。

最後になりますが、指導してくださった先生方、病棟のスタッフの皆様、その他たくさんの方からの指導があって研究を進めることができました。本当にありがとうございました。

サークル紹介

VSP（ボランティアスペシャルプロジェクト）

VSPサークル長　石田　慎也

VSPサークルは、地域から依頼されたイベントやボランティア活動に参加することを、主な活動内容としています。そういった活動を通して、その地域の方々や同じ活動に参加されている方々との交流を深めること、また自分たちの経験や見識を深めることを活動の目的としています。今まで行ってきた活動として、毎年24時間テレビに参加して、募金活動などを行っています。他にも、老人介護施設で行われるイベントへ参加するなど、様々な活動を行っています。活動範囲も広がってきており、上越市外からの活動依頼も来るようになってきました。

また、私たち自身でイベントを企画・運営することもあります。今年は、東日本大震災の影響より、上越にも避難されてきた方がいらっしゃいました。避難されてきた方々は自分たちが住んでいた土地の心配や慣れない環境での生活など、様々なストレスを抱えながら生活していたと思います。そういった方々に少しでも楽しい時間を過ごしていただこうと考え、私たちは避難所でのイベントを企画しました。イベントを通して、少しでもストレスを和らげることができたのではないかと感じました。また、交流を通して、私たち自身も多くのことを学ばせてもらったと感じています。

VSPサークルの最大の特徴は、イベントやボランティア活動に気軽に、楽しんで参加することができることです。ボランティアは一見敷居が高く、参加することをためらってしまうことが多いです。また、活動を続けていくと負担になってしまう時もあると思います。しかし、VSPサークルでは、自分が参加してみたいというものにだけ参加することができ、負担になることはありません。また、活動自体誰にでもできるようなことが多いので、あまり難しく考えずに参加することができます。ボランティアって参加しにくい、ボランティアには興味があるけどなんか大変そう、と考えている方には最適のサークルですので、よろしければ参加してみてください。

▲前列左から3番目が山口さん

▲前列左から3番目が山口さん

卒業生は今

医療法人社団武蔵野会
新座志木中央総合病院　看護師　古川　智仁

私は現在、整形外科病棟で働いています。私の働く整形外科病棟では患者様の年齢は幅広く、0歳から90歳台の方が入院されています。高齢者では主に大腿骨の骨折の患者様が多く入院されていますが、他にもヘルニアや脊柱管狭窄症などの脊椎疾患、上肢の骨折、交通外傷からリウマチの治療まで幅広い疾患の患者様が入院されています。

整形外科の特徴として、手術をしてからの患者様の回復が早いことが挙げられると思います。入院直後、手術後の全身管理からリハビリの早い流れのなかで、その状況にあった看護を考えて行っていかなければなりません。なかなか患者様の状況に適した看護を考えることは難しいですが、先輩や先生に日々優しく教えられ勉強させていただいています。

病棟の先輩と（左が古川さん）▼

他にも、退院支援ということで病院内のソーシャルワーカーと連携したり、他職種との関わりも多くあります。
まだまだわからないことは多いですが、勉強しながら患者様に適した最高の看護を行えるようになりたいと思います。

研究報告

子どもを亡くした遺族のグリーフワークを支える社会的ネットワークに関する研究

臨床看護学領域 小児看護学　講師　大久保　明子

現在、文部科学省の科学研究費　基盤研究（C）の助成を受けて、子どもを亡くした遺族の支援に関する研究をしています。この研究に取り組むきっかけは、“子どもを亡くした親の会”にボランティアとして参加する中で、最愛のわが子を亡くすということはとてもつらい体験であり、その悲しみはとても深いということを知ったからです。大切な人を亡くした悲しみは誰にでも起こるものですが、大切な人を亡くしたという事実を受け入れていくには多くの時間とサポートを必要とします。適切なサポートが受けられない場合は、健康にも影響があると言われています。ホスピスや緩和ケア病棟などでは、親や配偶者を亡くした遺族への支援が行われるようになってきましたが、子どもを亡くした遺族に対しての支援は、まだほとんど行われていません。

そのような現状がから、全国の小児専門病院や小児病棟の看護師を対象に、子どもを亡くした遺族への支援の実態と看護師の認識を調査しました。その結果、遺族支援は必要であるととらえているようですが、実際に行っている病院は少なく、今後も実施する予定はないとの回答が多くを占めました。その背景には、現在闘病中の子どもや家族のケアが優先され、遺族支援の時間やマンパワーの不足があること、遺族は患者ではないために医療費が請求できず、遺族支援は病院のボランティアで行われており、経済的にも実施が困難な状況があることがわかりました。

そこで、本学に子どもを亡くした遺族のためのサポートグループ“わかばの会”を設立しました。この会は、病気、事故、自死などで子どもを亡くされた方が、安心して悲しみを吐き出し、同じ思いを持つ仲間と悲しみを分かち合い、新たな一歩を踏み出すための場です。本学の小児看護学と精神看護学の教員がサポートさせていただいています。

今後もサポートグループの活動を継続し、遺族支援に関する研究に取り組みたいと思っています。

（わかばの会HP: http://members.niigata-cn.ac.jp/wakaba）

新潟県立看護大学
Niigata College of Nursing
〒943-0147 新潟県上越市新南町240番地
Tel 025-526-2811　Fax 025-526-2815
E-mail soumu@niigata-cn.ac.jp

編集後記

今回、開学10周年と共に、「ポルティコの広場」も20号を迎えることとなりました。開学以来継続されている行事や新たな取組みなど、様々な側面をお知らせできたのではないかと思います。また、実習や研究、行事、サークルでの様子から、学生が日々いきいきと過ごしている姿も、20号を作成しながら感じることができました。これからも、よりいっそう大学や学生の姿が地域の皆様に伝わるよう、記事づくりに励んでいきたいと思います。

入試・広報委員：渡邉　千春

http://www.niigata-cn.ac.jp
発行日：2011年12月20日

PRINTED WITH SOY INK
R70 古紙配合率70%、白色度70%の再生紙を使用しています。